

珠数章(二帖第五通)

そもそも、この三四年のあいだにおいて、当山の念仏者の風情
をみおよぶに、まことにもって他力の安心決定せしめたる分なし、
そのゆえは、珠数の一連をももつひとなし、さるほどに仏をば、手
つかみにこそせられたり、聖人まったく珠数をすてて、仏を拜めと
仰せられたることなし、さりながら、珠数をもたずとも、往生浄土
のためには、ただ他力の信心一つばかりなり、それにはさわりある
べからず、まず大坊主分たる人は、袈裟をもかけ、珠数をもちて
も子細なし、これによりて眞実信心を獲得したる人は、かなら
ず口にも出し、また色にもそのすがたはみゆるなり、しかれば、
当時は、さらに眞実信心をうつくしくえたる人いたりてまれな

うとおぼゆるなり、それはいかんぞなれば、^{みだに}彌陀如来の本願の、われらがために^{そうおう}相応したる。とうとさのほども、身にはおぼえざるがゆえに、いつも^{しんじん}信心のひととおりをば、われこころえ^が顔のよしにて、なに^{ちやうもん}ごとを聴聞するにも、そのこととばかりおもいて、^{みみ}耳へもしかしかともいらず、ただ^{ひと}人まねばかりの^{てい}体たらくなりとみえたり、この^{ぶん}分にては^{じしん}自身の^{おうじやうごくらく}往生極樂も、いまはいかがとあやうとおぼゆるなり、いわんや^{にやもん}門徒^{とどう}同朋^{ぼう}を^{かんけ}勸化^ぎの儀も、なかなかこれあるべからず、かくのごときの^{しんじやう}心中にては、^{こんど}今度の^{ほうど}報土^{おうじやう}往生も不可なり、あらあら^{しやうし}笑止や、ただふかくこころをしずめて^{しあん}思案あるべし、まことにもって人間は出^いずる息は入^いるをまたぬならいなり、あいかまえて^{ゆたん}油断なく、^{ぶっぼう}仏法をこころに入れて、^{しんどんけつとやう}信心決定すべきものなり、

あなかしこ

あなかしこ

(不読)

文明六、二月十六日早朝ににわか
筆を染めおわりぬのみ

珠数章の大意

この三、四年の間、ここに集まる念仏者を見ると、他力の信心を決定している様子がありません。念珠一連を持つ人もなく、み仏をややまう気持ちが欠けているようです。親鸞聖人は、念珠を捨ててみ仏を拝めとおっしゃったことはありません。もちろん、浄土往生のためには、念珠を持たなくても、他力の信心一つ

で十分です。しかし、住職たるものは、袈裟をもかけ、念珠を持って礼拝し、み仏をうやまう気持ちをおもてに出してもよいでしょう。そのことを縁として、眞実信心をいただいた人は、かならず口に念仏を称え、またふるまいにも信心を得ているようすがあらわれるものです。しかし今、眞実信心を得ている人はいたって少ないように思われます。

それは、み仏の本願の尊さをわが身に受けとっていないからです。信心についてよく心得ているような顔をして、なにを聞いてもしっかり耳に入らず、ただ人まねばかりをしているというありさまです。これでは自分の往生もあやうく、まして、門徒やお同行の教化などできるはずはありません。そのような心では、このたびの浄土往生もかないません。なんとも気の毒なことです。よくよく考えてく

ださい。人間はまことにはかないものです。決して油断をせず、仏法を聴聞して信心を決定するように心がけるべきです。